

大津京 (下)

7. 京と4寺院

大津京の宮は錦織地域に営まれたと判明したが、都の構造はどうであったろう。先述のように、大津北郊の地形は今よりさらに狭長であったため、他の都城のように碁盤目状に整然と区画した街区を設定することは不可能であった。このため、建物設置可能な南滋賀や滋賀里、穴太といった扇状地に関連官衙や宅地が分散的に置かれたものではないかと思われる。しかし、こうした遺構はまだ断片的にしか見出されておらず、その復原は今後の調査結果を待つほかはない。

ただ、大津北郊には大津宮時代に存在した4つの寺院があり、それを手がかりに京について考えてみたい。

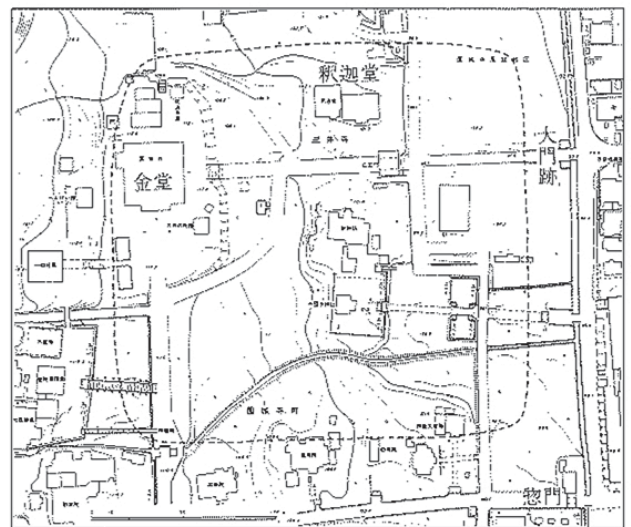
この4寺院とは、南から園城寺前身寺院（園城寺遺跡）、南滋賀廃寺、崇福寺跡、穴太廃寺である。園城寺前身寺院はまだ未発掘であるが、園城寺の金堂、釈迦堂を中心とする一帯に南滋賀廃寺で出土すると同様の複弁蓮華文軒丸瓦や「サソリ文軒瓦」、横断面が凹状を呈する方形平瓦などが散布し、ここに大津宮時代に寺院の存在したことが知られる。そして、この地は当時の官道であった小関越に通じる交通の要衝に位置している。

南滋賀廃寺は南滋賀の複合扇状地の扇中央部に近い高所にある。戦前の発掘調査やその後の部分的な調査によって大和川原寺式の伽藍配置をとる荘麗な寺院であったことが明らかになった。そして、すぐ西方にある檜木原瓦窯（ほんのきばらが）の発掘調査によって、この寺院で用いられた2系統の瓦、すなわち、瓦当裏面に布目痕のある複弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦・通

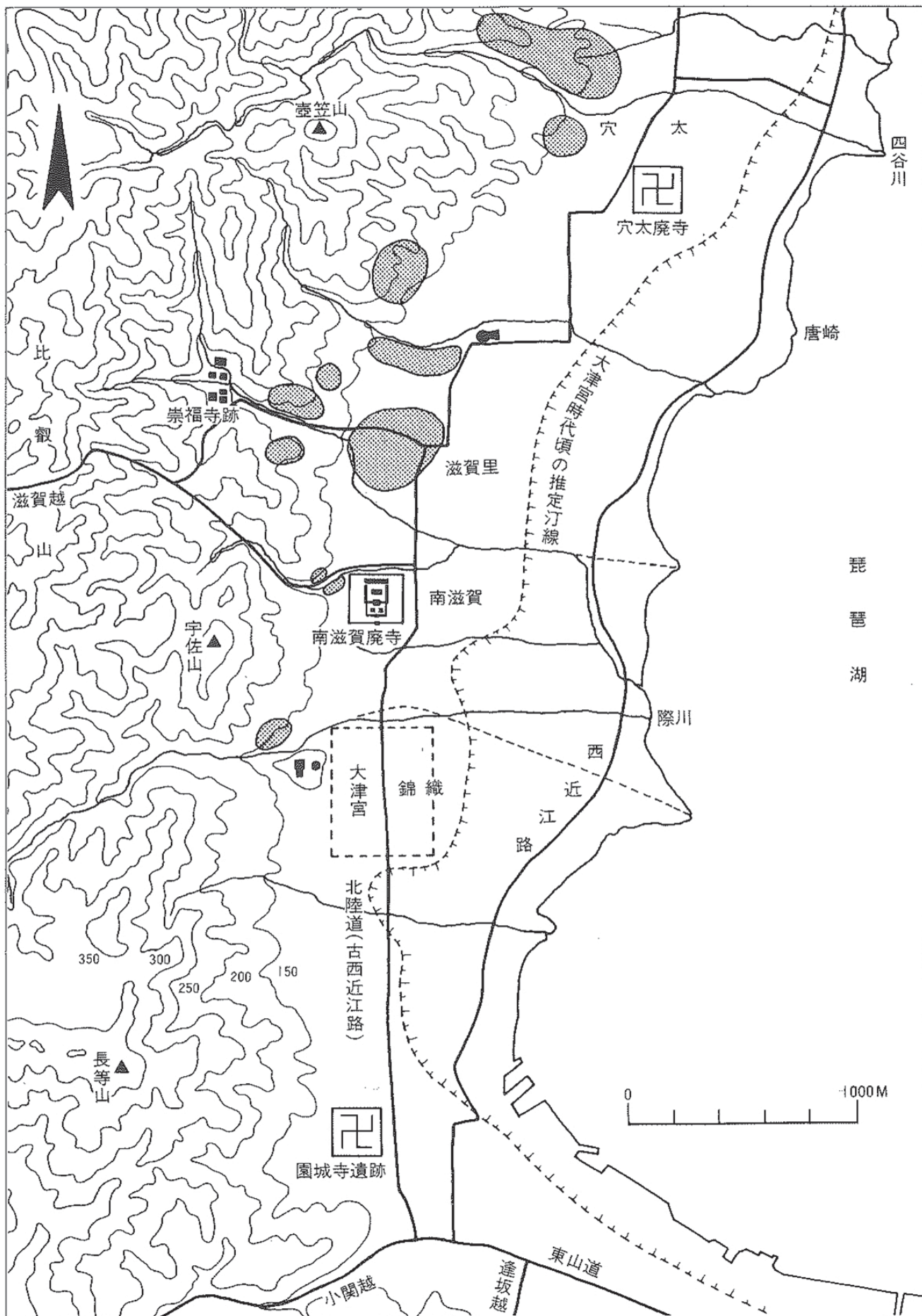
常の丸瓦・平瓦（A系統）と、蓮の花の側面観を意匠とした蓮華文方形軒瓦（サソリ文軒瓦）・横断面が凹状ないし凹状を呈する素文方形軒平瓦・方形丸瓦・方形平瓦（B系統）は、大津宮時代に同時に焼成し使用されたことが判明した。この寺院は滋賀越（山中越）によって山背から比叡山を越えて近江に入る南側の要路に位置している。

崇福寺跡は天智天皇勅願の寺と伝えられる寺院で、これも戦前に発掘調査され、3つの尾根にまたがって伽藍が配され、中央尾根上にある塔の心礎から金蓋の瑠璃壺・金・銀・銅の舍利容器一具と荘嚴具が発見されるなど著名な寺院である。この寺院は滋賀里の西方山中にあり、滋賀越の近江側に下りてきた北側の要衝に存在する。

穴太廃寺は2つの伽藍が方位を異にし、重複して存在する。創建期の伽藍は東に塔、西に金堂を配し、これを回廊で囲む形式で、再建伽藍は創建伽藍より約33°西に振る軸線をもつもので、大和法起寺式の伽藍配置をとるも



第1図 園城寺前身寺院の予想される範囲(点線内)



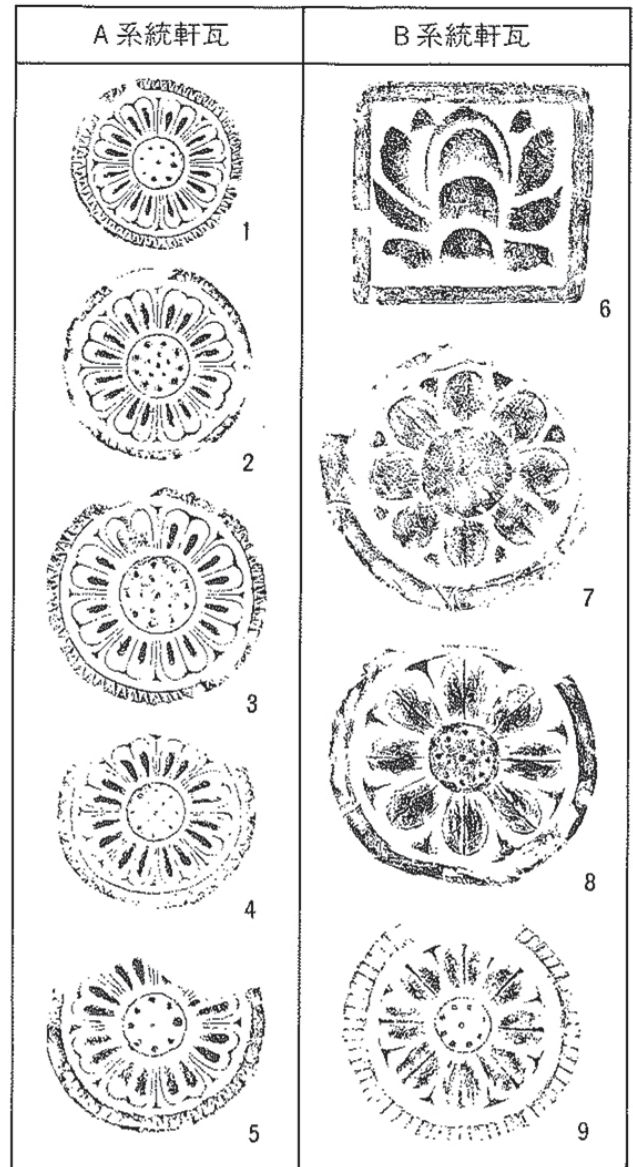
第2図 大津京周辺地形図（網目は古墳時代後期の群集墳、黒印は前期古墳）

のである。この再建伽藍には南滋賀廃寺と同様のA系統・B系統の瓦が伴うようで、少なくとも大津宮時代に全面的に建て替えた様子がうかがわれる。穴太の地は『延喜式』によると北陸道の第一の駅家である穴太駅家が置かれた所で、北陸道の要衝に当る。このため、北陸道に接して在る穴太廃寺は大津京城の最北部の交通の要地に置かれたものとみられる。

このように、この4寺院は大津宮時代に特異なB系統の瓦を使用するなど互いに密接な関連をもちながら存在していたことがうかがわれ、さらにその立地がいずれも交通の要処に位置するという共通点を備えている。いわゆる大化改新の際、中大兄皇子が蘇我入鹿殺害の後飛鳥寺に入り、城として防備を固めたという記事などからも知られるように、古代の寺院が宗教的性格ばかりでなく、城郭的性格の一面をもっていることが知られる。こうみると、これら4寺院は大津京を防備する意味も兼ねて交通の要衝に計画的に配されたものと考えられ、これらに囲まれた錦織・南滋賀・滋賀里・穴太の地域が近江の都、大津京であったと推断されるのである。

近江遷都は、朝鮮半島における高句麗・百濟・新羅3国の争覇に唐・日本が介在し、白村江で日本・百濟軍が惨敗した後の戦時体制下においてなされたものである。

大津京は西に急峻な比叡山塊、東には広大な琵琶湖を擁して天然の要塞となし、陸路においても湖上の水運によっても東国や北陸に容易に抜けられる地を占め、その要衝に寺院を配した構造をとっている。百濟の遺臣を重用した天智天皇は、彼らの主導により西日本各地に朝鮮式山城を構築したが、大津京造営についても彼らの指導を得、比叡山にも朝鮮式山城を構築した可能性も考えられてくる。また、『日本書紀』の壬申の乱の記事から、近江朝廷側の北の守りとして三尾城(高島町)の存在が知られる。さらに、草津市北大萱町や守山市赤野井町・欲賀町の寺跡から大津北



第3図 大津北郊における2系統の瓦
南滋賀廃寺(2・6・7・8)、榎木原瓦窯(1・3)、
穴太廃寺(4・5・9)

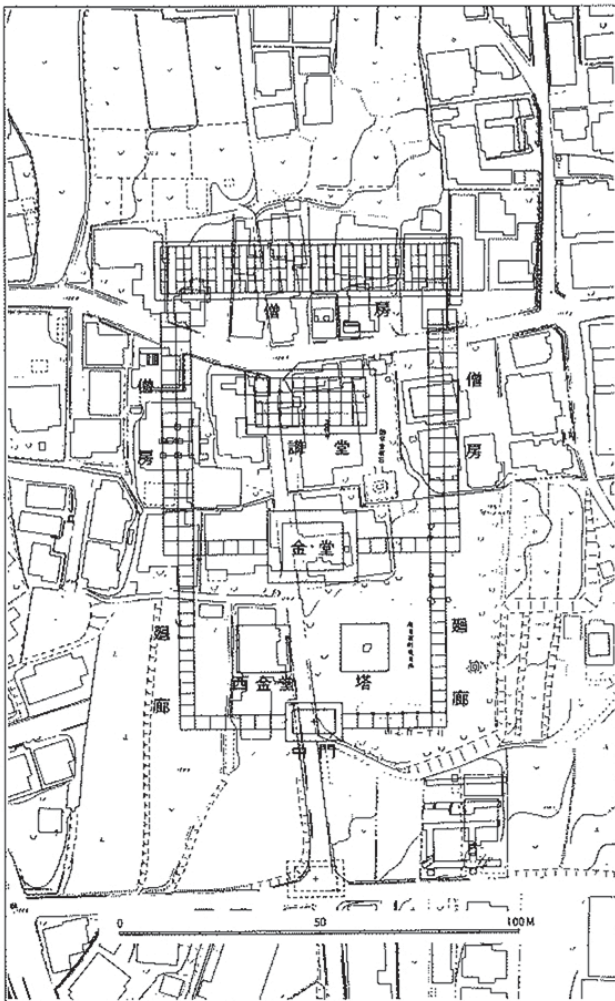
郊でみられるB系統の瓦が出土しており、琵琶湖をへだてた対岸にも大津京と関連する寺院等の存在が考慮され、また、石山寺旧境内からも南滋賀廃寺で出土する瓦と全く同じ単弁八葉軒丸瓦・単弁六葉軒丸瓦など数点の出土が知られ、瀬田川河畔の伽藍山を含むこの地に大津京と関連の強い寺院等のあったことが想定される。

このように、二重・三重の防備がなされた大津京は、まさしく防御の都であったと推断されるのである。

冒頭にも述べたように、現在、大津京はよ



第4図 崇福寺跡地形実測図（滋賀県報第10冊による）



第5図 南滋賀廃寺主要伽藍(史跡指定後の調査を加味したもの)



第6図 穴太廃寺

うやくその姿を現わし始めた段階である。その具体的構造についてはこれからの多くの遺構検出を待たなければ明らかにし得ない。ここでは、現時点で理解される私なりの大津京像を描いてみたが、今後の調査によってさらに詳しく判明するであろうし、修正すべき点もでてくると思われる。

（林 博通氏提供）

参考文献

林 博通『大津京』ニュー・サイエンス社
昭和59年